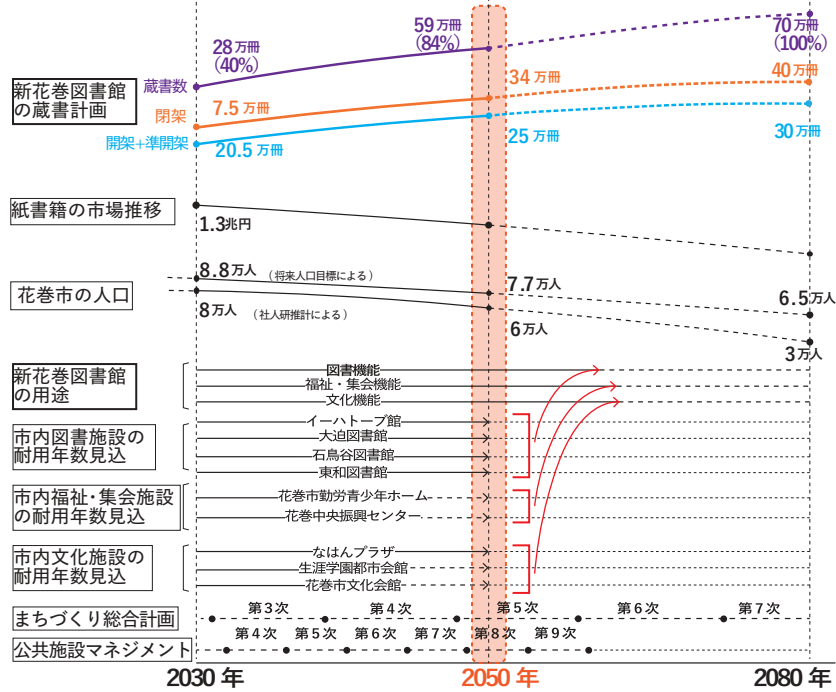


これからの花巻の50年をどう考えるか

新花巻図書館の基本計画には、**今後50年の蔵書数目標が70万冊**と記載されています。また新花巻図書館は、大迫図書館、石鳥谷図書館、東和図書館を束ねる本館としての役割を担いますが、これらとの関係は既存図書館の**耐用年数**や**人口動態**によっても変化していくでしょう。**3次、4次花巻市まちづくり総合計画**が発表される2050年までに、図書館のあり方も再検討されることが予想されます。いま国内の公共建築は、このような長期的な視野とその使われ方の関係が問われています。

そこで私たちはまず、新しい図書館が今後50年間、**どのように使われていくべきか**、また**建築がどのような未来を見据えることができるのか**を考えることから始めたいと思います。そして**オープン後20年の2050年**を目処に蔵書計画や使い方を再考する時期と捉え、おそらく**変わることはない人**と**本との親密な関係と、変わっていくであろう社会的要請**に対して、**5つの論点**から本計画を提案します。

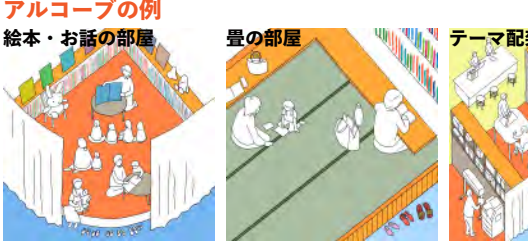


図書館の主な役割である**保存、収集、編集などの機能は時代が経っても変化しない**と考えられる一方、花巻市において、周辺の公共施設の用途や求められるものが変わるという不確定な未来を視野に入れた柔軟な計画が必要です。それは固定的なものでなく**輪郭を変化させ続ける図書館**だと言えるでしょう。宮沢賢治の言葉に「**永久の未完成これ完成である**」という言葉があります。花巻市の図書館も、このように社会変化や要請に応じて、常に変化し続ける図書館がふさわしいのではないかと考えました。



蔵書数に応じて使い方を換えられる「アルコブ」と「まどテラス」

竣工時に70万冊分の書架を全て用意することは50年間、何にも使えない空間を抱えることになります。そのため、将来所蔵されるはずのスペースをまずは**専門書が配架される準開架や、研究スペース、テーマ配架等**に利用される小さな部屋の集合「**アルコブ**」としてつくり、閉架・開架と現状・将来計画のバッファーとして計画します。そして一旦閉架書架は34万冊分の収納量にとどめ、**2050年**に図書館のあり方を問う契機とすることを提案します。また、開館時には本棚に対して本が少ない状態となりますが、空きスペースを展示やホワイトボード、アーカイブ棚など他の用途に活用できるよう、フレキシビリティのある本棚を提案します。



屋内化可能な「まどテラス」

各フロアに半屋外の「まどテラス」を複数計画します。将来建具を設置すれば屋内化することが可能で、市民活動のスペースを確保しながら蔵書数の増加に対応することができます。

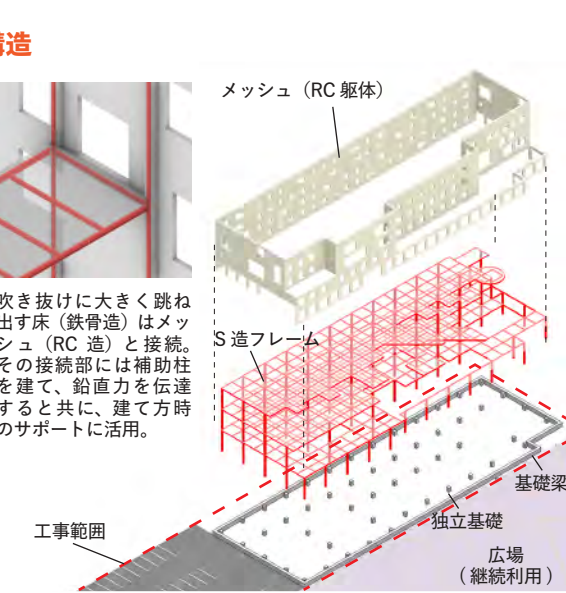
本と出会い、読み、学ぶ、経験の普遍的なスケールの「コーナー」

私たちが一人で本を読む時の空間、複数人で勉強する時の広さ、本を探す時の本棚の間隔や高さ、といった身体にまつわる基本的な経験は今後も変わらないでしょう。そのため、本と人をつなぐ**家具デザインは特に重要**です。利用者が自由に居場所を選択し、各々の時間を過ごせる「**コーナー**」を家具も含めて考え、静かに本を読んだり、研究したり、ただ階下のひとを眺めたりすることができる空間をつくります。コーナーは各階のフロアテーマや利用に合わせて多様な環境をつくります。

80年の耐用年数を持つ堅牢なメッシュ構造

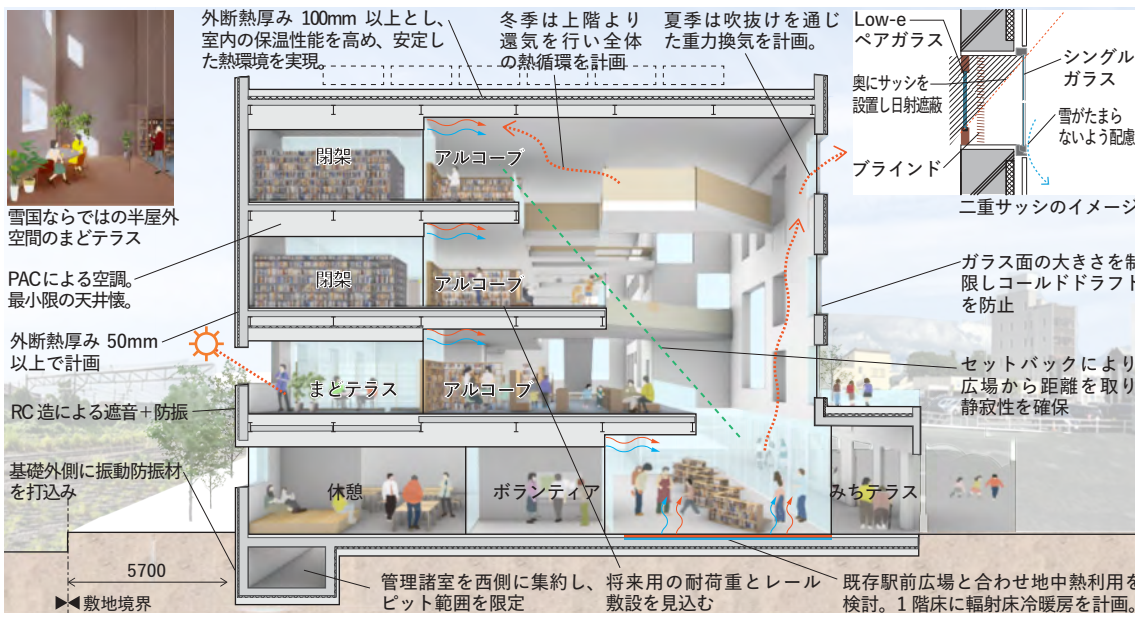
花巻市文化会館は開館50年を迎え、さらに設備更新によりさらに30年維持すると聞きました。本施設も、シンプルかつ堅牢な**RC造で外郭をメッシュ状につくり、線路からの振動や騒音、漏水を防ぎつつ地震力を担う計画**とします。一方内部は、将来の間仕切りの変更や家具の更新ができるように、**耐震性能を担わない鉄骨造**でつくります。軽量かつ長スパンが可能で、設計中のプランニングや配架の自由度を高めます。基礎梁範囲を外周に限定することで、打設量および掘削量の削減（＝インシヤルコスト減）に加え、南側の駐車場をヤードとして利用し、**工事中でも様々なイベントを広場で継続して行う**ことができます。工期の前半が冬季にあたりますが、ピン接合による鉄骨工事を先行させることで滞りなく工事を進めることが可能です。

	2030年	2050年	2080年 基本計画の場合	2080年 蔵書数見直しの場合
まどテラス	7.5万冊 本棚余裕26.5万冊	34万冊	40万冊	?万冊 ?万冊
アルコブ	4.5万冊 本棚余裕0.5万冊	5万冊	7万冊	子ども 学習 展示 研究 福祉 ? ?
開架	16万冊	20万冊	23万冊	?万冊



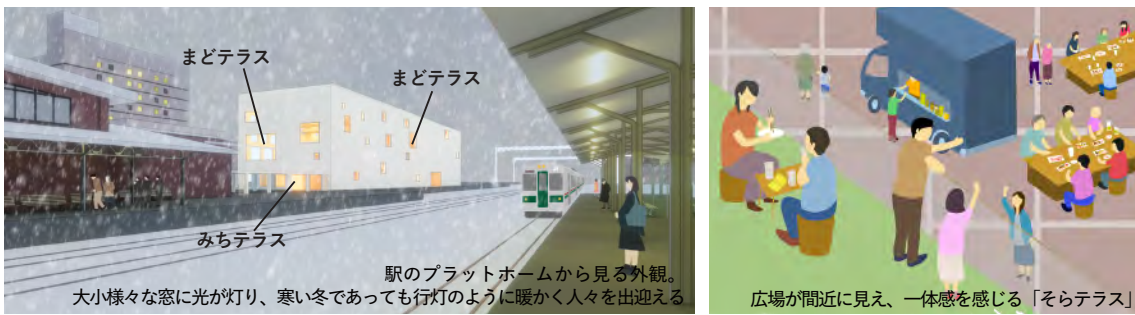
4 省エネルギー性と更新性を備えた環境計画

階高を抑えたコンパクトな4階建てとし、空調負荷が大きい窓サイズと屋根面積を抑制することで、**外皮面積を最小限に抑えます**。各階にはパッケージエアコン（PAC）を設置し、省スペース化と更新性を確保します。1階は**床輻射冷暖房**を検討し、吹抜けの冬期の暖房立ち上がりを安定させ、冷気が溜まる最下階を足元から暖めつつ、夏期においても居住域を効率的に空調します。外壁は適切な断熱厚さを考慮した外断熱とし、熱損失を最小限に抑えます。また、外壁開口部は全て**方位によって大きさや仕様を変えたばポツ窓**とし、外壁の厚みも活用して熱環境を調整でき、大きなコールドドラフトを生じさせない仕様とします。例えば、北面では外付けの日射取得型、南面では内付けの日射遮蔽型のLow-eペアガラスとするなどを検討します。特に立面の大きい東西面については、夏期の夕方の冷房負荷増大を抑えるため、窓を多く必要としない諸室を西側に配置し、開口部のサイズや二重ガラス内部へのブラインド設置などを検討します。これらの方法により、**ZEB Readyの確実な実現**を図るとともに、屋上及び駐車場等への太陽光発電パネル設置により**Nearly ZEB以上**も視野に入れて検討します。



5 歴史を継承し文化を育む、関わり合う広場計画と立面計画

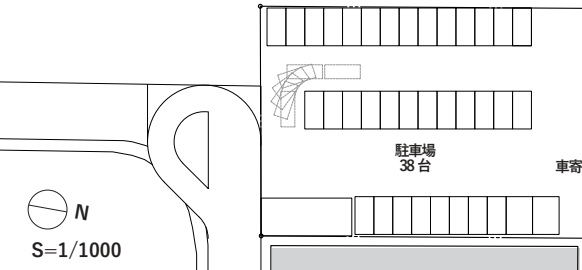
駅前多目的広場に面して半外部の「**みちテラス**」を南北に通し、**駅から駐車場までを結びます**。イベント時の休憩や観覧席、電車の待合としても利用でき、その上部の「**そらテラス**」と共に、**立体的に活動が現れるファサード**を広場にに向けてつくります。また、内部のセットバックする空間構成は、**花巻の河岸段丘とも呼応**することで、坂本町から上り下りする街の体験と連動する図書館を目指します。一方、このセットバックは、駅前多目的広場の**イベント時の喧騒から一定の静かさ**を保ちます。また建物全体のボリュームは、なはんプラザのスケールに合わせつつ、大小内外の無数の窓に、図書館で過ごす人々の様子が現れる風景をつくりだします。



これからの花巻の50年のための計画

4階建ての人員配置について

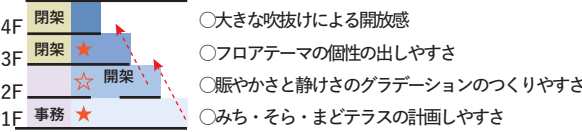
これからの図書館サービスでは、従来の固定されたレファレンスカウンターだけでなく、**スタッフが利用者へ積極的に出向いて接点を増やす巡回型の運用**がふさわしいと考えます。またこの運用方法が4層の図書館に有効か検証するために、1次審査以降同規模程度の複数の図書館に実地見学およびヒアリングを行いました。巡回型により「**問い合わせの少ない文学などを配架することでレファレンスカウンターを設けないフロアをつくる**」「**吹抜けによる管理上の見通しを確保する**」といった知見が得られ、空間にゆとりをもつ4層の計画の可能性が十分あると判断しました。ただし、4層案を確定とするのではなく、**運用の柔軟性を考慮し、4階を閉架書庫やバックヤードのみとして市民が立ち入らないフロアをつくる代替案も用意**しています。これは空間的な魅力を極力損なわないように配慮した提案です。最終的な4階の方針については、今後、皆様とのワークショップで決定していきたいと考えます。



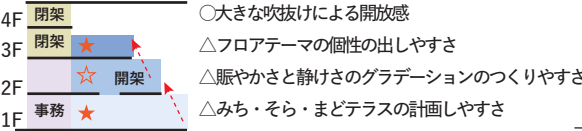
3層と4層の比較

限られた敷地内で見通しがよく、また将来的な可変性と管理動線のコンパクトさを考慮すると4層であることには優位性があります(もちろん3層の可能性もあります)。人員配置を減らすための工夫はフロアテーマの設定や構成によって可能であり、現段階では4層案でプランニングしました。

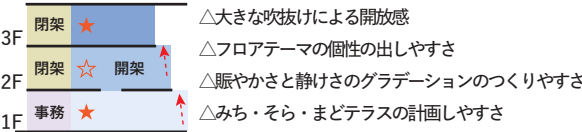
4階に利用者が訪れる場合



4階を閉架書庫とバックヤードのみとする場合



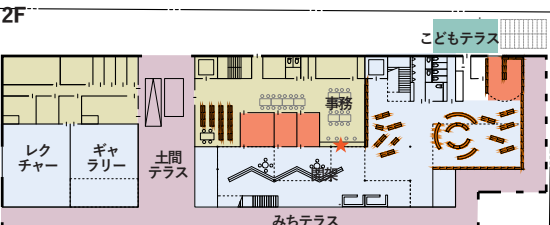
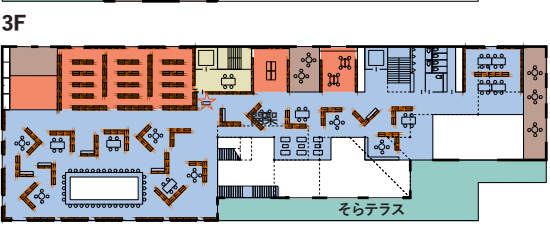
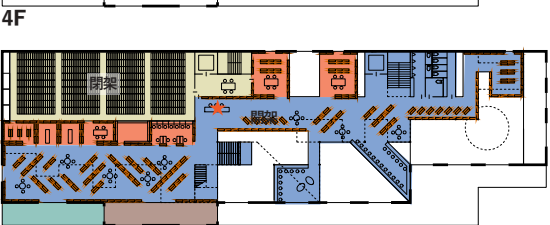
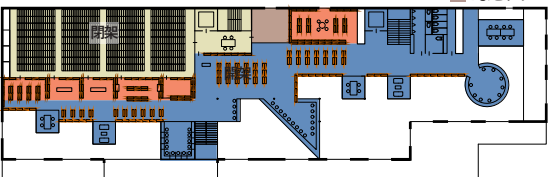
3層の場合



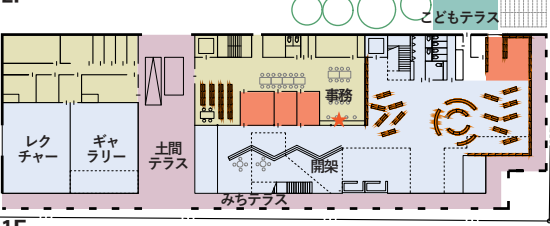
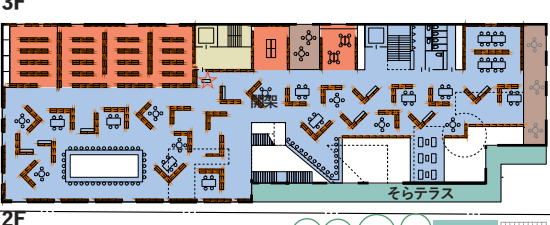
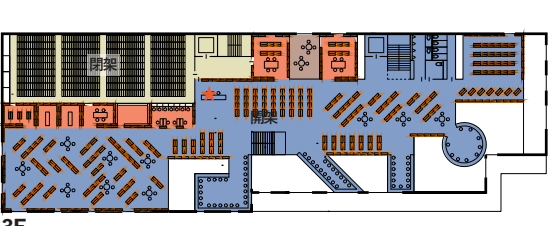
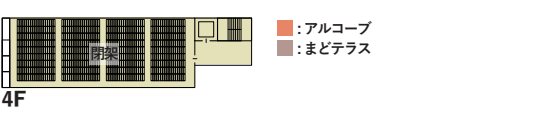
★：レファレンスカウンター設置 ☆：ミニカウンター設置



平面イメージ(4階に利用者が訪れる場合)



平面イメージ(4階を閉架書庫のみの代替案)



循環する図書館

宮沢賢治が農や芸術、宇宙などが融合する有機的な思想体系を築いたように、花巻市には豊かな知の土壌があります。この土壌をフロアテーマに設定し、それらが循環する創造的な図書館を目指します。

多様な活動を担うアルコブ

企画展示や市民貸出スペース、作業スペースなど図書以外の機能を入れたり、畳やカーペットといった仕様を様々に変更することが可能です。



閉架が見えるアルコブ

一部アルコブと閉架書庫はガラス越しに見えることを検討します。スタッフは閉架から直接出入りが可能です。



拡張可能な閉架書庫

将来、閉架書庫を増設する際は、アルコブに拡張できます。そのためアルコブの床は、耐荷重やレール敷設を予め見込んだ計画とします。



利用者からも感じられるバックヤード

バックヤードとの境界壁には一部にガラス窓を設けることで、利用者から図書館の運営などを見ることができ、身近に感じられる図書館を目指します。



本の搬出入の可視性

東西を貫通する土間テラスでブックモビルの搬出入を行い、ここからブックモビル書庫や地域配本室、作業室、事務室へ無駄のない動線が続きます。

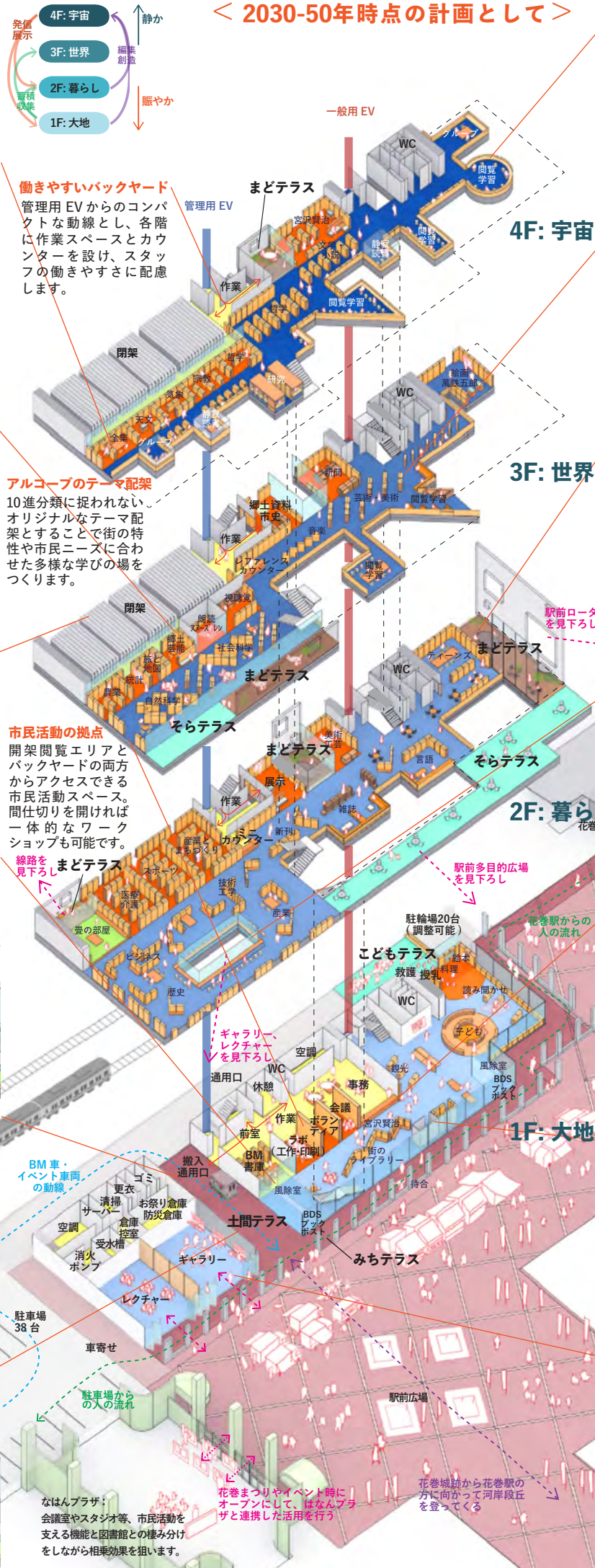


土間テラスの多目的利用

半屋外スペースの土間テラスは、本の搬出入に加え、イベント時の準備や出店の拡張スペースなど多目的に利用可能です。



< 2030-50年時点の計画として >



立体的に見える様々な活動

読書や調べ物、おしゃべり、勉強などの図書館における様々な活動が、吹き抜けを介して立体的に見えます。



家具がつくる小さなコーナー

それぞれが居場所を見つけ快適に過ごせるための家具の設えとコーナーをつくります。



安心感のある「まどテラス」

各階に屋根付きの屋外テラスを設けます。囲まれた安心感があり、街を見ながら読書やおしゃべり、飲食など、サードプレイスとしての図書館の幅をひろげます。



ギャラリーを見下ろすカウンター席

吹抜けから展示の雰囲気を感じることができそれと関連させたテーマ配架も可能です。



メインカウンター

視線が届く位置にメインカウンターを配置します。本の貸出、レファレンス、貸室対応など一括して管理できます。



街のライブラリー

市民向けの棚貸しスペースを検討します。「みちテラス」からも見え、掲示板や観光案内と合わせて、官民協働による街の情報発信を担います。



拡張可能なレクチャーとギャラリー

可動間仕切りを開けて一体的に利用可能です。イベント時は駅前多目的広場と連続でき、さらに吹抜けを介して上階と断面的に繋がります。

